

日本モンサント(株)

山根精一郎社長

G M、ノンG Mを含めた多様性・競争が 将来的にプラスの要因になる

遺伝子組み換え作物に対する日本人の反応は一概にして、「NO!」である。しかし、花粉症耐性を持ったコメの登場で、その風向きもやや変わりつつあるのかもしれない。だが、それでもまだまだG M作物に対する反応が良くなったとは言いい切れない。世界的に見ても、G M作物の消費量は増えており、日本においてもそれは同様といえる。遺伝子組み換え技術で高い技術力を持つ、日本モンサント(株)の代表取締役社長、山根精一郎氏にG M作物の現状についてお聞きした。

食用G Mの普及と栽培用G Mが認められない理由

昆吉則(「農業経営者」編集長) 食

用への普及が進んでいるにもかかわらず、先進国のなかで、なぜ日本だけG Mの栽培にブレーキがかかっているのだとお考えになりますか? そのあたりのところからお聞かせ頂けますでしょうか。

山根精一郎 食への普及という点で

は、G Mの輸入量は確かに増えていきます。しかし、消費者側は自分たちが遺伝子組み換えで作ったものを食べているという意識がないのが問題かと思えます。その大きな理由のひとつは、一般への情報伝達がなされていないということだと思います。実際は遺伝子組み換え穀物は輸入されていて、その多くが油や飼料、加工品原料に使われているという現実があるにもかかわらず、正しく情報伝達がされていないため、自分の

食べている豆腐や納豆は遺伝子組み換えじゃないから「私は遺伝子組み換え穀物を食べていない」と考えられてしまっているんですね。その意識があるゆえに、栽培は無論、もつてのほかだ、みたいな形になっているのではないかと。

もうひとつは、表示制度自体が、遺伝子組み換え食品が混ざっていても5%未満であればnon G Mと表記できるのも、誤解を与えている点ではないかと思えます。

昆 行政の広報の仕方にも問題があるのではないのでしょうか。国の政策といえますか行政の情報公開の仕方についてどのようなお考えをお持ちですか。

山根 アメリカにはFDA(米国食品医薬品局)というところがありまして、ここは非常にポジションが明

確なんです。自分たちが評価したこの食品は安全で、理由はこうですと、正々堂々と明確に広報していくのです。日本の場合、そういった機会がありません。

以前、週刊ポストで、納豆には遺伝子組み換え大豆が使用されているが、パッケージへの表示制度は、混入率が5%までなら未表示が認められていることから、遺伝子組み換え大豆使用の表示がないことを取り上げていました。ただ、そのなかで残念だったのは本文中に一切、使用されている大豆は国から安全性が認められています、と書かれていなかったことです。やはり大前提として、「きちんと科学的に安全性が認められた」ものなのだと、伝わらないと消費者の方からすると不安が広がってしまいます。

行政がはつきりと、これは安全性が確認されているから問題ないんだと言うか、なんとなく曖昧に言うかで、消費者の理解というのは大きく違ってくると思います。

昆 実際、欧米先進国のG Mの消費は、日本の消費量と比較してどうですか。

山根 アメリカでは大量に国内消費されています。欧州も大豆などは輸入していて、EU全体だと日本と同じくらいの量を輸入しています。

よく言われるのが、アメリカなどでは大豆は動物のエサで、人間は食べないから誰も文句を言わないんだ、ということですが。

実際には、G Mの大豆タンパクというのは非常に普及していて、ハンバーガーのつなぎなどにも使われているなど、アメリカの大豆の85%以上がG Mです。これはかなりの消費量です。

EUや日本でももちろん消費されています。ただ、これがうまく伝わっていないというのが理解の進まない一因だと思います。

地球環境、資源の保護を主体にしたG M作物

昆 モンサントはラウンドアップ耐性大豆「ラウンドアップレディ」に

ついて取り上げられることが多いですが、それ以外の機能性に着目した遺伝子組み換え技術については、どのような取り組み、方向性があるのでしょうか。

山根 機能性で我々が考えていることは3つあります。それは、まずマーガリンを作るときに、原料となる大豆油に水素添加をするのですが、リノレン酸と反応して、心臓疾患などの原因になるトランス脂肪酸が発生してしまいます。これを防ぐため、油に含まれるリノレン酸を減少させた従来育種ですが「ビステイプ」という低リノレン酸の大豆を開発しました。

次に、魚にしか存在しないD H AやE P Aといった、コレステロール値を下げ、不整脈の症状を緩和するといわれている、オメガ3という油糧用種子作物の開発も行っています。これにより、心臓疾患が改善されるのが期待されています。

最後に、乾燥耐性を持った種子の開発も進めています。理由は、今、世界の水の7割が農業用に使われていますが、世界的に人口が増えたことから工業用の水も増えていきます。将来的にいずれ水飢饉がやってくる可能性もあるため、乾燥に強い種子を作っているというわけです。これは地球環境や食糧問題、水の確保の

山根精一郎

■プロフィール (やまね・せいいちろう)

1970年 東京大学理学部生物学科植物課程卒業

1976年 東京大学農学博士号取得。日本モンサント(株)アグロサイエンス事業部入社。生物研究部部长、バイオテクノロジー部部长、アグロサイエンス事業部部长、取締役副社長/テクノロジー本部部长を歴任後、2002年に代表取締役社長就任し、現在に至る。





点からも重要な技術になると考えています。

昆 日本にとってラウンドアップ耐性のある大豆を作ることに意味はあるのでしょうか。また、どういうメリットがありますか。

山根 農業にはご存じのように、農業生産には虫と病気と雑草の3つの敵があります。ラウンドアップ耐性技術は、その雑草をいかに簡単に取り除くかというところに重きを置いていて、1回撒くと、雑草はなくなり作物の生育は向上します。

また、バイオ作物懇話会というところが2年間、圃場で試験をしましたが、生産コスト削減と規模拡大が可能になるという結果が出ています。これは、現在、日本の農業の方向性として打ち出されている、大規模化、生産効率の向上を図るのに良

編集長 インタビュー

い技術だということです。実際に試験をした農家の方は、「あの技術があればウチはもっと良い農業ができるんだ」と、感じていたようです。具体的な数値は計算していませんが、農家の方のメリットは非常に大きいように思います。

GM、ノンGMを含めた多様性が農業界にとって重要な要因になる

昆 GMがこれだけ普及していることを考えると、ノンGMを作ることの優位性もでてくると思うのですが、その点についてどうお考えですか。

山根 私は多様性というのとはどんな場面でも重要だと思えますし、農業でも多様性は維持されるべきだと考えています。有機をやる、従来の品種をやる権利は守られるべきです。

同時に、遺伝子組み換え作物を植える農業も存在する、共存という農業形態になればいいと考えています。

昆 日本人というのは科学的に評価することに弱い国民なのでしょいか。ジャーナリズムの報道を疑うということを知らず、そのまま受け入れてしまっている現状をどうお考えでしょうか。

山根 私は基本的に「お上」という言葉が、その答えを如実に語っていると思います。日本人の文化レベルは非常に高いわけですから、本来はそういう判断ができるはずですよ。

しかし、日本は子供のころから判断は人に任せて、自分で考える訓練がされず、みんな仲良く横並びでいきましたよという具合です。逆に欧米では、小学校から授業でディベートを行い、自分で考えて発言するという訓練がされています。そういう教育の違いが大きいと思います。

昆 遺伝子組み換えの高い技術を持つモンサントが、その技術ですべての種子を自分たちのものにして、独占するのではないかと危惧する声もあります。いかがですか。

山根 モンサントがすべての種を独占するのは不可能です。なぜなら、種子には所有者がいて、その人達からその権利を奪うことなどできないからです。例をあげるなら、種子は

ハード、遺伝子組み換え技術はソフトと考えて頂けるとわかりやすいかと思います。

たとえば、コンピュータにはいろいろなメーカーがあり、OSはウィンドウズやMAC、リナックスがあります。

どのコンピュータにどのOSを載せるかは所有者の自由です。われわれの遺伝子組み換え技術もそれと同じで、品種の所有者が、ウチの技術を気に入ってくれば使うということです。

また、同様に選ぶような世界を作りたいたとも思っています。なぜなら、そこには有機もあれば、従来の品種もある。お互いに競争し、切磋琢磨しながら農業を作っていく、そしてそこに必要な技術はなんのかを考えていければいいと思います。

決して遺伝子組み換えで席巻できるはずがないですし、多様性があることは必要で、そこは絶対に崩したくないと思います。

それぞれが相手の立場と考え方を尊重し、認めていく寛容性が社会のなかに育って欲しいと考えています。

また、もつと多くの方々と議論をする場を持ち、意見交換をすればお互いに理解を深めていけるのではないのでしょうか。